仏教を身近にする伝道誌　　浄土真宗を弘める会

道標

どうひょう

d o h y o

2019 秋季号

年間特集　「いのり」

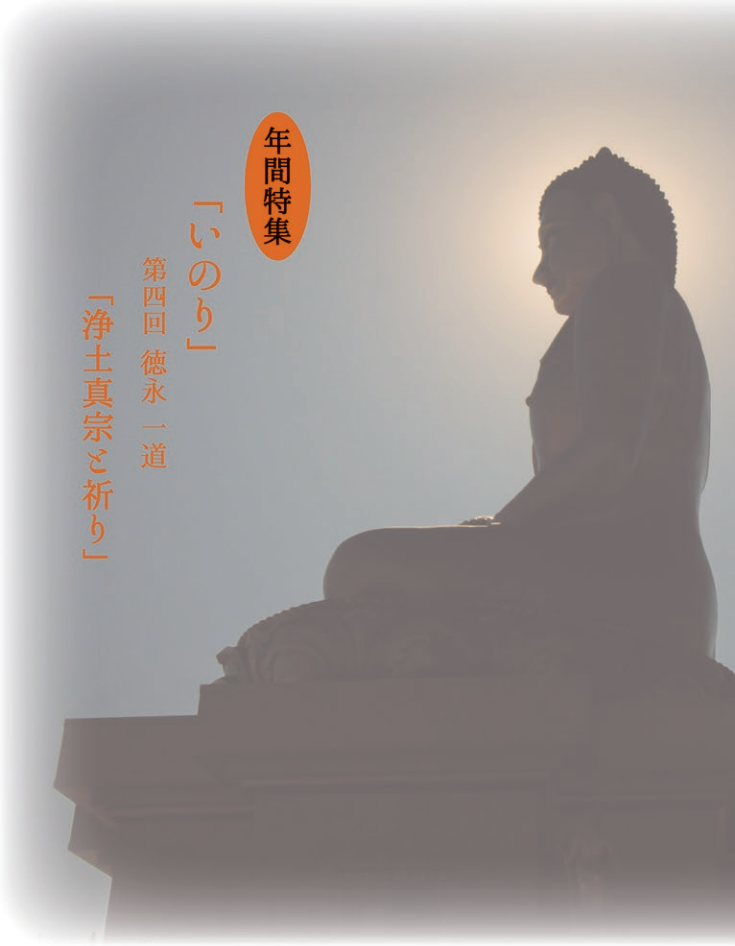
第四回・浄土真宗と祈り　徳永 一道

連 載

あなたのいのちの物語　悲しみの底のいのち

習わしを科学する　飾 る

道しるべ　拝むこと



年間特集

「いのり」

第四回 徳永一道

「浄土真宗と祈り」

▼浄土真宗は「祈りなき宗教」と言われる。阿弥陀仏の願いを聞き受けることが何よりも大切なことであって、「私の祈り」は不要とされるのである。それでは、浄土真宗において「いのり」はまったく無意味なのだろうか。本願寺派勧学寮頭の徳永一道和上に聞いた。

浄土真宗が祈りを公認？

浄土真宗の教えには特に禁句というものはないが、宗祖親鸞聖人の教えに照らすと用いにくいものがあることは否定できない。それは迂闊（うかつ）に用いると聖人の教えを誤解に導くおそれがあるからである。「道路が混んで往生した」とか、「他力本願の生き方ではダメだ」というような誤用はいたるところで見られるので、一々それらをあげつらう気にもならないほどだが、そういう概念や用語の一つとして今は「祈り」を取り上げてみたい。

例えば年賀状の「新年にあたりご尊家のご多幸をお祈りいたします」というような表現は世間ではきわめてありきたりのものであって、特に問題とするほどのことではない。しかし、浄土真宗でそれを堂々と用いることにためらいを覚える人は少なくないのではなかろうか？ そして「祈る」を用いる代わりに「念じます」とか「念じ上げます」などと書く人はきわめて多いだろうと思われる。どちらにしたところでその意味内容に大した違いはないのだが、それを用いることにある種のためらいを覚えてしまうのである。実は私もその一人であって、毎年の年賀状でそれを意識してしまうことは否定できない。

以上が「祈り」ということに関して浄土真宗全体に感じられる雰囲気であるが、それを真っ向からくつがえすようなできごとがあったことはまだ記憶に新しい。それは２００２年12月10日のある全国紙の朝刊第一面の記事である。それは、「祈り〝公認〟浄土真宗本願寺派」という大きな見出しをつけられた囲み記事で、これを目にした本願寺の教学関係者は仰天させられたのである。なぜならこの問題を取り上げて教学関係者が議論したという事実は一度もないし、ましてそれによって、これまで禁じられていた「祈り」という言葉を用いても差し支えはない、などという決定がなされた事実もさらさらなかったからである。

阿弥陀仏の「祈り」

この人騒がせな記事が掲載された原因は、それを書いた若い記者が当時本願寺教学研究所所長であった故大峯顕（おおみねあきら）先生へのインタビューで聴いたことを恣意的に拡大解釈したものにほかならなかった。要するに宗教的にまったく無知な若い記者が早とちりして、まるで鬼の首をとったように上記の記事を作成してしまったということであろう。いちばんの被害者は大峯顕先生であったというほかはない。

大峯先生がおっしゃりたかったことは、世界のいかなる宗教においても「祈り」を説かないものはない、したがって浄土真宗においてもなんらかのかたちでそれが認められなければならない、ということであった。今は亡き大峯先生の真意をこれ以上

世界のいかなる宗教においても
「祈り」を説かないものはない。

阿弥陀仏の「祈り」宇宙的な「祈り」

付度（そんたく）することは差し控えて、ここでは、浄土真宗の教えにおいて「祈り」という概念はどこに求めればいいのか、について考えてみたい。

私どもが接している親鸞聖人の教えの全体的な雰囲気からすれば、「祈り」などという言葉や概念の入り込む余地はない、と感じている人は多いのではなかろうか。すべてにおいて本願他力のはたらきが先行するのであって、人間の「祈り」などというものは用をなさない、と。確かにそれはそうであろうが、その本願他力そのものが「祈り」であるとするならば、一概にこの概念を否定することはできなくなる。

アメリカをはじめとする西洋世界に「禅」を紹介して、そのもとである「東洋」の宗教的真理を浸透させた第一人者であった故鈴木大拙博士は、浄土真宗にも深い理解をもって数々の英語の著作を遺されたが、その一つである英訳『教行信証』で、阿弥陀仏の本願をOriginal Prayerと訳して、当時の話題になった。これは直訳すると「根源的な祈り」という意味で、本願をそういう視点で捉えられたことはかつてなかったことだから大きな話題になった。本願は一切の衆生を浄土に救い取りたいという阿弥陀仏の「祈り」、更にいえば宇宙的な「祈り」であるということであろうか。

念仏者の「祈り」

親鸞聖人が数多くの和讃を遺されたことは取り立てて言うまでもないが、『高僧和讃』の善導讃に、「仏号むねと修すれども　現世をいのる行者をば　これも雑修となづけてぞ千中無一ときらはるる」という一首がある。言うまでもなく、これは現世の御利益（ごりやく）を求めて念仏することを戒められた和讃であるが、聖人の著作において「祈り」がすべてこの例のような否定的な用い方をされたということはできない。その晩年に門弟の性信坊に宛てて書かれた消息には、「世のいのり」という言葉が用いられている。その内容は、

わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念仏こころにいれて申して、世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。

ということであって、念仏者のあるべきすがたとしての「祈り」が明らかにうたわれているのである。それは如来からたまわった他力の信心において、「この私の救い」のみならず、「世の一切の人たちの救い」が願われていることを知らされることではなかろうか？

徳永 一道（とくなが いちどう）
大阪外国語大学英語学科卒業。龍谷大学大学院真宗学専攻博士課程修了。1985年よりハーバード大学世界宗教研究センター・ライシャワー日本学研究所・東アジア言語文化学部客員研究員。1987年、ハーバード大学神学部沼田講座教授。2003年、本願寺派安居本講師。現在、京都女子大学名誉教授、本願寺国際センター英文真宗聖典翻訳委員会委員長、本願寺派宗学院講師、本願寺派勧学寮頭、大阪教区河中南組正福寺住職。
［著書］英文浄土真宗聖典シリーズ（共訳・本願寺国際センター）、『現代思想と歎異抄』（Alfred Bloom著の翻訳と解説、毎日新聞社）、『神学の方法をめぐるエッセー・神と「空」』（Gordon・D・Kaufman著の翻訳と解説、ヨルダン社）、『大乗仏典、法然・一遍』（共著、中央公論社）、『浄土文類聚鈔講讃』（永田文昌堂）、『観無量寿経を読む』（本願寺出版社）、『親鸞聖人―その教えと生涯に学ぶ』（共著、本願寺出版社）他。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

8話目

「悲しみの底のいのち」

魯迅「明日」

《音がしないが――チビがどうかしたか》というのが物語の始まりだ。夜分遅くの咸亭酒屋の会話だが、「チビ」というのは壁を隔てた隣の単四嫂子の家の3歳の子、宝児のことだ。一昨年後家になった単四嫂子は、自分と子供の暮らしのためにふだん夜遅くまで糸紡ぎの仕事をしている。だが、この晩は高熱で顔が赤くかつ黒ずんでいる宝児のことが心配で、仕事をしているわけではないが眠れない。

「お札もいただいたし、願もかけたし、買い薬ものませた。これで効き目がないとすれば、どうしたものだろう――あとは何小仙に診てもらうほかない。でも宝児は、夜だけ容態が悪くなるのかもしれない。あしたになって、日がのぼれば、熱が引いて、喘ぎもとまるかもしれない。病人にはありがちなことだから」。そうこう案じているうちに夜が明ける。ところがどうも宝児の様子がよくない。

貯めてあった有り金全部をもって、何小仙に診てもらい、処方箋にしたがって薬屋に行く。待っている間に、「宝児が不意に小さな手をさし出して、かの女の乱れた髪をぐいとひっぱった。これまで一度もなかった挙動なので、単四嫂子はギョッとした」。家に帰って薬を飲み、単四嫂子はじっと様子を見ていた。午後には一度、《かあちゃん》とよんだが、その後、汗をびっしょりかき、様子がおかしい。「あわてて胸をさすってやりこらえかねて嗚咽した」。じきに宝児の呼吸は止まり、単四嫂子の嗚咽は号泣にかわった。

向かいの王九媽が質屋に行って棺を買う費用を調達してくれる。翌朝、その棺は届く。単四嫂子は死んだ宝児のために死者の旅立ちのためにできるあらゆることをやる。それがすむと咸亭の主人が手配して人夫をやとって共同墓地へ葬らせた。手伝ってくれた人のために王九媽とともに食事を供し、やがて皆が帰っていく。

単四嫂子部屋に帰ると、そこには誰もいない。「いやに大きい部屋が四方からかの女をとり囲み、いやにがらんとしてしまった道具が四方からかの女を抑えつけて、息するのも苦しい」。単四嫂子には宝児が死んだことが確かにわかった。部屋を見たくないので、灯を吹き消すと、涙ながらに思い起こされる。

「そうだ、いつか自分が糸をつむいでいたとき、そばで茴香豆を食べていた宝児が、小さな黒い眼を見はって、じっと考えに沈んだあと、こんなことを言ったっけ。《かあちゃん――とっちゃんはワンタンを売ったね。おいら、大きくなったら、ワンタンを売るよ。うんと売って、うんとお金をもうけて――かあちゃんにみんなやるよ》」。そのときは、紡ぎ出す糸の一本一本に意味があり、一寸一寸がみんな生きているように思えたものだ。ところが今はどうか。もう宝児と会うことはできない。「かの女はため息をもらして、ひとりごちた。《宝児や、おまえ、またきっとここにいるはずだね、夢で私に会いに来ておくれ》そして眼を閉じた。早く睡って、宝児に会うために」。

魯迅の小説にたびたび登場する「魯鎮」という架空の町は、魯迅が幼少期を過ごした紹興がモデルになっている。

物語は以下のように終わる。「わずかに暗夜だけが、明日になり変ろうとして、この静寂の中を疾走しつづけるばかり、あとは暗闇で犬が何匹か、ウーウーほえているだけであった」。

三晩目の暗闇の場面に至って、読者は単四嫂子の心の動きが身近なもののように感じるだろう。親しい人との死別の経験を思い出す読者も多いと思う。眼を覚ました単四嫂子はどのように悲しみに耐えていくのか。その「明日」を想像することは、社会の困難から目をそらさずに、時代を生きていく道を探ることでもある。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

習わしを科学する

飾る

われわれは、日々飾ることに難儀しています。女性であれば髪飾り、首飾り、腕飾り。あるいはファッションの選択にあれこれ悩むことが多いのではありますまいか。男も同じで、近ごろの若い人は眉毛を剃って整えたり、ヒゲを微妙に伸したり、いろいろ身体を飾る工夫に余念がありません。飾り抜きには、われわれの生活は考えられぬ、というのが現実です。そのくせ「飾らないお人柄」という言いまわしがありますように、どこかで飾らないのがよいという発想も捨てられません。

飾る文化は外来文化、飾らない文化が日本文化、とするイメージがあります。たとえば仏教は外来文化ですから、仏前はキラキラと荘厳します。一方神道は固有文化ですから伊勢神宮のように白木で造られて飾りは少ないし、第一しっかり扉が閉じられていて飾るべき内部は見えません。こうした〝常識〟を支えたのが近代の建築美学です。ブルーノ・タウトが昭和八年に日本に来て、桂離宮を絶賛したことはよく知られています。タウトが逆に罵ったのが日光東照宮。陽明門のように余すところなく彫刻された過剰な飾りを否定し、簡素にして機能的な桂離宮を賞める、というのが近代建築の思想。有名な〝Less is More〟を標語のように使った近代建築家ミース・ファン・デル・ローエの思想です。ギリギリまで削り取ったものこそ美しいという考え方と、わびさびに象徴される日本美の思想とが重なりあって、日本の美は飾らないところに特徴がある、とされてきました。

これはいうまでもなく近代日本が作りあげた神話です。

飾りは日本人にとっても美の原点です。飾りの大切さを一貫して主張してきた美術史学者の辻惟雄さんの説では、挿頭からきているのではないか。『万葉集』などにもあるように草や花を髪に挿すことで、いわば髪飾りの原点です。日本固有の文化は装飾性に富んでいる、というのが辻さんの主張です。なるほど考えてみますと、縄文時代の火焔式土器を見ても、平安時代の十二単の異称も戦国時代の城郭建築も、いずれをとっても装飾性が豊かです。そしてその最たるものは琳派の装飾画でしょう。さらに辻さんは異端と従来見られていた伊藤若冲も、その飾りの美術の一角に据えて考えてきました。

なるほど日本美に装飾性の豊かさという特質があることは理解できました。しかし琳派の影響を受けたオーストリアの画家グスタフ・クリムトの画風を見ると、やはり装飾性に根本的な違いがあるように思えます。光琳の燕子花図屏風を見ると、地の広々とした金箔の空間が花との間に微妙なバランスを取っています。描かれた部分は描かれていない部分に支えられています。

日本の飾りの本質は飾る部分と飾らない部分の微妙な拮抗にあるのではないでしょうか。それは仏壇の飾りでも床の間の飾り、茶の湯の飾り、はたまた個人の内面でも同じではないかと思えます。

尾形光琳による『燕子花図』。国宝。大正初期まで西本願寺が所蔵していたが、現在は東京の根津美術館が蔵している。

熊倉 功夫（くまくら いさお）

１９４３年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長を歴任し、現在MIHO MUSEUM（ミホミュージアム）館長、国立民族学博物館名誉教授。２０１３年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和　うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉　千利休』、熊倉功夫著作集（全7巻）等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

天岸浄圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。

拝むこと

最近、神社参詣の様子を見て大きく変わったと気づいた。若者たちが「二拝・二拍手・一拝」の作法で参詣している。また、御手洗舎で口をすすぎ、手を清める姿も作法にかなっている。

思いついた理由はテレビ放送の「神社参拝の正しい作法」の影響だった。また、偶然電車の中で耳にした女性の会話では、神様には「洗米」を供え、ホトケさまには炊いた「ご飯」を供えるという話題だった。この情報源もテレビ番組だろう。作法は簡単に波及する。

昭和二〇年八月十五日の敗戦を機に日本は「思想・信仰・信条の自由」を手に入れた。何を拝んでもクレームがつかなくなった。ところがその途端、拝む意味を問わなくなった。皮肉になるが、現代人は気軽に何でも拝む。実は何も拝めていないのだ。敗戦まで国家教育を通して、現人神（天皇制）という宗教を強いられてきた。

元来、拝むとは自らの価値基準の確立を意味していた。それを強要される理不尽さは言葉に尽くしがたい。その状況下ではたとい完全に誤りであるとして拒否したなら、拒否自体が誤りとして断罪されたのである。日の丸の小旗の波間に「お国のために名誉の戦死を」と虚しい言葉を強いられたなかに、「死ぬな」と言った僧侶がいた。彼は出征兵士に向かって「死ぬな」「殺すな」「弾に当たるな」。彼は非国民と呼ばれて何度も収監された。けれども出所すると同じ発言を繰り返す。確信犯（？）であった。ただ、この人が「ホトケさま」を拝んでいたことは確実である。

拝むとは、作法通りに手を合わせることだけではない。人としての正しい判断基準を確立することである。拝むことの自由のなかで、その意味が忘れられようとしている。残念である。

編集後記

人生は思い通りにならないことの連続である。しかし人間は儘ならぬ世の中を我が儘に生きていこうとする。それは人間の「存在としてのどうしようもなさ」と言えるかもしれない。「いのり」は多くの場合、我が儘から生まれる。大いなるものを拝んでいながら、その大いなるものを自己中心的な欲望を満足させるための奴隷にしてしまうのが「いのり」の一側面である。

しかし一方で、それとは異なる「いのり」のかたちもあるのではないか。災害が起きるたびに、被災地の安否を気遣い、その無事を願う声がそこかしこから響く。これもまた「いのり」であろう。「いのり」という行為が持つ豊かな意味を探りたい。そんな思いに駆られて、年間特集に「いのり」というテーマを設定した。

今回徳永先生が触れてくださったように、浄土真宗において「いのり」という概念は難しい問題を含んでいる。しかしあらゆるいのちを救うという本願のこころに感動した者が、大悲の活動に参画する「いのり」もあり得るのではないかと感じた次第である。

（釈圓眞）

表紙の絵

嵐山清秋

嵐山は観光客でごった返しているが、夕方ともなれば急に激変して人通りも絶える。保津川（桂川）の最終地点嵐山は見事な自然の樹木で美しい。そこから近い所に慈覚大師円仁が開いたとされる天台宗二尊院がある。二尊とは釈尊、阿弥陀二尊を指す。建暦二年（一二一二）八十才で入滅された法然上人は最初東山の大谷の地に埋葬されたが、比叡山の僧兵たちが念仏の教えの広がりを恐れ、遺骸を暴き辱めようとしたため、嵐山の二尊院に運ばれ、そこからの奇瑞によって現在の粟生光明寺に運ばれ荼毘に付された。法然の他力の教えはその後浄土宗よりも浄土真宗に受け継がれている。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇一九年 秋季号 2019年9月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：ktda8.10@gmail.com